増田院長の今日もニコニコ Vol.30

院長 増田 剛

埼玉協同病院が加盟する民医連（全日本民主医療機関連合会）は、1953年の創立以来、一貫して様々な「困難」「困った」に寄り添って来ました。1959年伊勢湾台風、1995年の阪神淡路大震災、2011年東日本大震災などの大災害、自己責任論が蔓延する昨今では、子ども食堂やフードパントーリーなど生活困難を抱える人々を支援するための実践を続け、コロナ禍でも大いにその力を発揮しています。「困ったところに民医連あり」、これは私が大好きな言葉で、今年２月には同名の冊子が全日本民医連から出版されました。お金が無い人、家が無い人、保険証が無い人、とにかく困ったら協同病院へ。時折周りから聞こえるこんな声に、誇りを感じる職員が多いと思います。今回の特集から、ほんの一部分ではありますが、そんな職員の思いを感じ取って頂けると幸いです。

投書のご紹介 虹の投書箱だより

入院中、毎食食事がおいしくて体に染みました。特に、お魚料理、臭みもなくふっくらしていて、調理法が知りたいくらいです。

骨もなく食べやすかったです。おかげで元気に退院することが出来そうです。

ありがとうございました。

入院中のお食事がおいしかったとのご意見、本当にありがとうございます。

食養科職員は、入院生活で唯一の楽しみである食事をより一層おいしく提供することを目的に、日々努力を重ねています。

特に魚料理に関しましては、今まで食事満足度調査でも臭みがあるなどのご意見をいただいた経験もあるため、改善策に取り組んでいたところでした。そのような時にこのようなお言葉をいただき、感謝するとともに今後の仕事への励みにもなりました。ありがとうございました。　（食養科 科長　廣澤教子）

HAPPY BIRTHDAY 27000例目の赤ちゃん誕生お祝い会!!!

1983年11月４日に当院開設初の赤ちゃんが誕生してから38年余り、３月23日に27000例目の赤ちゃんが誕生し、お祝い会を開催しました。

まもなく新病院へ生まれ変わり、多くの命を見届けてきた分娩室も新しくなります。これからも『あなたらしい妊娠・出産・子育て』を支えていけたらと思っています。

おぎゃ～、今日も埼玉協同病院の産婦人科病棟に元気なうぶ声が響いています！

埼玉協同病院だより
季刊 ふれあい No.30 2022年6月 Summer

〒333-0831 川口市木曽呂1317
Tel. 0570-00-4771
ホームページ https://kyoudou-hp.com/

30th 医療生協さいたま
地域とともに 30 年
ありがとう健康つながる笑顔∞

埼玉協同病院だより
季刊 ふれあい No. 30 Summer

特集

困りごとに対応できる 埼玉協同病院

病気のこと、生活のこと、患者さんの日頃の困りごとに対応する埼玉協同病院の取り組みを特集します。

小峰看護長

ここに行けば助けてもらえる病院に

ご案内

困ったときに頼りにできる制度

専門医シリーズ

後藤 慶太郎 医師

一人ひとりの背景をみて
解決を探る“社会派ER”

民医連 埼玉民医連
医療生協さいたま 埼玉協同病院

Special feature

「ここに行けば助けてもらえる」困ったとき、頼りにされる病院に

生活上の困難を抱える人のお産や子育てを、
医師や行政とともに支援する小峰将子看護長に話を聞きました。

小峰 将子
助産師
産婦人科・小児科
看護長

助産師による問診で、信頼関係を築いていく

先日、当院で27000例目の赤ちゃんが誕生しました。みんなで喜びを分かち合う瞬間は、何度経験しても心が弾みます。

私がこの仕事を選んだのは、看護師だった祖母の影響です。祖母は定年を過ぎても、町の小さな産婦人科医院の看護師として働き、私も弟も、その産院で産まれました。祖母が産院で働く姿を見るたびに「かっこいい！」「私も看護師になりたい」と憧れていましたね。

高校を卒業後、子どものころからの夢を叶えるため、看護学校に入学。卒業後は助産師と保健師の養成学校に進学し、それぞれの資格を取得しました。

当院に入職したのは、1999年の４月です。産婦人科の助産師として働きはじめ、2019年から、産婦人科・小児科の看護長をしています。産婦人科と小児科が連携してお産や子育てをサポートできるよう、スタッフを統括し、チームワークを促すのが、私の仕事です。

当院で対応しているお産は、毎月20～30件。無差別平等を掲げる当院で出産する方の中には、経済的に困っている方、外国人の方、精神疾患のある方など、社会的に複雑な背景を抱えている方もいます。当院の産婦人科では、助産師が毎回、妊婦さんの問診をとります。出産までの10回以上にわたる妊婦健診で、妊婦さんと助産師のあいだに信頼関係が生まれ、それぞれが抱える悩みや不安を話してくれるようになります。妊娠中から情報をキャッチし、医療スタッフをはじめ、地域の保健センターや市役所の子育て相談課などと情報共有しながら、必要なサポートを検討し、ケアを進めています。

赤ちゃんを一定期間、病院で預かることも

育児環境や支援体制に不安があるときは、焦って退院をするのではなく、保健センターなどとも連携しながら、赤ちゃんを一時的に病院で預かって、育児環境を整える時間を作ることもあります。定期的に通うお母さんとコミュニケーションをとりながら、赤ちゃんが帰る日を迎えたときには、みんなが笑顔にあふれています。そんな時、スタッフは必ず『心配だったらいつでも連絡してきてね』そう声をかけています。

孤独な夜は不安が募ります。妊娠中も産後も何度も何度も夜中に電話がかかってくることもあります。『心配だったら来ていいよ』そう言われて、朝までぐっすり眠って帰っていった方もいます。

24時間365日、不安に寄り添うスタッフの姿を頼もしく感じています。

『こんなに大きくなりましたよ』病院を訪れるたびに声をかけてくれ、赤ちゃんが元気に成長している姿を見せてくれる方もいます。困ったときや誰かに助けを求めたいとき、私たちを頼りにしてくれ、一緒に考えて一歩前に進み、スクスク成長している赤ちゃんの姿を目にできること、母としてひとまわり大きくなった姿を目にできることは、何より嬉しいし、仕事のやりがいを大いに感じる瞬間ですね。

病院は社会の縮図を見ているよう

とはいえ、よい関係性が作れる事例ばかりではありません。一生懸命かかわり、サポートを提案しても、こちらの思いが届かず「もう、かかわらないで」と去っていく人も。そんなとき、心苦しい気持ちになりますが、その人が本当に困ったとき「あの病院に行けば助けてもらえる」と頼ってくれたらいいという思いをスタッフと共有しながら、日々の業務にあたっています。

最近、「病院は、社会の縮図のようだ」と実感します。入職したころは、地域の人やおじいちゃん、おばあちゃんなど、妊婦さんを支えてくれる人がたくさんいました。けれども現在は、だれにも「助けて」と言えず、社会から孤立する妊婦さんが増えています。「あと少し、公的な手助けがあれば、もっとお産がしやすいのに」「あと少し、何らかの制度があれば、赤ちゃんを泣く泣く相談所に預けなくてよかったのに」と思う事例を数多く見てきました。社会で生活する人の目線に、もっと政府が降りてきてほしい。そんな思いを噛みしめて、目の前のお産と向き合っています。

その人の「病気」を見るのでなく、「背景」を見る

民医連は創立以来、「SDH（健康の社会的決定要因）」という問題意識を持っています。私も入職当時、先輩の「その人の病気を見るのでなく、背景を見なさい」という言葉を大切に、仕事をしてきました。いま、コロナ禍による社会格差で、これまで何とか生活できた人たちが立ち行かなくなるケースが増えています。そこで当院は「困りごと、困っている人に対応できる病院」というスローガンを改めて掲げ、目標の一つにしています。私も産婦人科や小児科のスタッフとともに、一つ一つのいのちに寄り添い、大切に育んでいきたいと思います。

頼りにできる制度のご案内

水本 留美子
社会福祉士
医療社会事業課　主任

埼玉協同病院では医療費のことや、生活のことなど、
さまざまな困りごとに対応するための制度や取り組みがあります。

＼医療費が支払えない方へ／

「無料低額診療事業制度」について

埼玉協同病院では、経済的に困窮しているため、医療費がなく、受診をしたくてもできない患者様のご相談をお受けし、状況に合わせて無料低額診療事業制度を活用しながら、安心して受診していただけるよう支援しています。この制度は、医療費の自己負担分を減額もしくは減免するという制度です。制度活用をしながら生活の立て直しができるよう相談調整をしています。

＼無差別平等の医療を目指して／

差額ベッド代をいただきません

当院では、お金のあるなしに関わらず適切な医療を必要な方に提供するため、1978年の開院以来、一貫して個室料などのいわゆる「差額ベッド代」はありません。

＼不安を抱えている外国人の方へ／

外国人医療相談会について

2016年からNPO法人北関東医療相談会「AMIGOS」さんと協力し、外国人を対象にした無料の医療相談会を実施しています。(新型コロナ感染症のため2020年度以降休止中)

2020年1月の相談会では、身体測定、レントゲンや血液検査・尿検査などを行い、15カ国、90名の方の検査を行いました。

＼明日食べるものがないという方へ／

「フードドライブ、フードパントリーにじいろ」について

失業や休業などを余儀なくされ収入がなくなり、医療費だけでなく、「明日食べるための食糧がない」と相談に来られる方も増えています。そのような状況に対応するべく、食材提供する活動を継続して行っています。

フードドライブ

- 老人保健施設
  みぬま内にて
- お渡しは要予約

フードパントリー
にじいろ

- 老人保健施設
  みぬま駐車場にて
- 毎月最終土曜日13時

どちらも予約制です。
事前にお電話（048-294-9222）をお願いします。

組合員・地域の皆様へ
「ご協力のお願い」

フードドライブ、フードパントリーの活動は、各企業の助成金や関係諸団体からの寄付によって食材を購入したり、組合員や職員、地域住民の皆様の食材提供等のご協力によってなりたっています。ご家庭で消費しきれない食品や食材（消費期限3ヶ月以上のもの）等がございましたら、ご連絡いただければと思います。

新しい病院の名前は

「ふれあい生協病院」に

4月28日（木）に第10回建設委員会総会で、
新しい病院の名前が発表されました。

【命名の背景】

①ひらがなを使用することで、優しい印象を与える。
②「ふれあい」は埼玉協同病院の機関紙として定着しており、「ふれあい会館」としてなじみもある。
（＊ふれあい＝人々が集い、寄り添う様）
③「生協病院」という呼称は、医療生協さいたまの事業所名として組合員から認識されている。
＊熊谷生協病院、秩父生協病院で使用されている。
④協同病院との区別もしやすい。
⑤一長一短があり、地名を使用することは控えた。

(掲載CGは計画段階のものであり、施工上等の理由により変更となる場合があります。提供：竹中工務店)

増田院長から、命名の背景について説明がされ、参加者から拍手で確認がされました。長らく「第２病院（仮）」という名称で、行政の手続きや皆さんにも説明していましたが、今後は新しい病院名を広くお知らせしていきたいと思います。

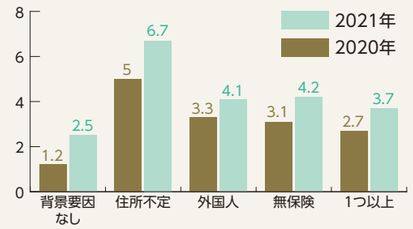
『ふれあい生協病院』または『生協病院』という名前で、呼んでください。

データで見る医療の質

療養上の問題を抱えた患者の救急受け入れと相談支援

埼玉協同病院では、医療の質改善（QI）の指標を設定して、医療水準・質の面での改善目標を決めて取り組んでいます。今回とりあげる指標は、医療へのアクセスが困難な患者の支援についてです。

当院に救急受け入れ要請のあった患者の背景要因別要請回数



受療上の問題を抱えた患者の救急受け入れ状況、その後の支援

救急隊からの受け入れ要請時、受療上問題となりそうな生活背景や問題状況（背景要因）が伝えられます。無保険、一人暮らし、高齢者、酩酊者、外国人、住所不定などです。医療費の支払いをはじめ、治療を行ううえでさまざまな支援が必要となり、専門のスタッフが必要となるためです。このような患者の受け入れは通常スムーズとはいえず、特にこれらの問題状況のない患者と比べると、受け入れまでの要請回数（医療機関数;当院受け入れまで）が多い傾向にあります。昨年は新型コロナ感染症患者受け入れのため、一般の病床が減ったことや、近隣病院の一時受け入れ休止などの影響で、生活背景要因が特にない患者の要請回数も増えています。

当院の救急受け入れ患者は年間3200～4000人ほどですが、受け入れ時の状況や情報収集を詳細に行うことで、療養のための相談支援が必要となった患者は、100～170人（3～5％）でした。多くは生活保護の相談や介護保険の活用、その他の経済支援など社会資源の活用・相談ですが、住まい・療養場所探しなどの支援を行うこともあります。

専門医シリーズ 29

後藤 慶太郎

医師
副院長　兼救急科部長

一人ひとりの背景をみて解決を探る“社会派ER”

埼玉県の二次救急指定病院として救急医療を担う、埼玉協同病院。後藤慶太郎医師は、救急科（ER）の専任救急医として働いています。「患者さんをほっとけない」と語る後藤医師の仕事への思いをうかがいました。

PROFILE

〈経歴〉　東葛病院副院長、（救急総合診療科科長、HCU医長）、2021年４月　埼玉協同病院（救急科部長）、2022年５月　副院長兼任

〈資格〉　日本救急医学会　救急科専門医、日本内科学会　認定内科医、日本プライマリケア連合学会　認定指導医　プログラム責任者

医療像を考えた３つの出来事

“社会派ER”と呼ばれる後藤慶太郎医師は、2021年４月、埼玉協同病院の救急科部長として着任しました。救急科（ER）は、地域の救急医療を担う最前線。川口市や近隣から救急車で運ばれる年間約3300台の救急搬送の受け入れや、入院中に急変した患者さんの対応など、重要な役割を担っています。

兵庫県神戸市生まれの後藤医師は、高校時代の体育の授業で大腿骨を骨折。四度の入院や手術経験がきっかけで、医師の仕事に興味を持つようになりました。高知医科大学（現・高知大学医学部）に進学後の1995年、医学生にとって将来の医療像や医師像を根底から考え直す３つの出来事が起きました。薬害エイズ訴訟の支援運動、阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件です。

「薬害エイズ訴訟の原告・川田龍平さんと母親の川田悦子さんの取り組みに関心をもち、医学生だった私もカンパ活動などに参加していました。そんな中、薬害エイズ訴訟支援に取り組んでいる病院を見学する機会がありました。それが、民医連の病院との出会いです」

救急医の道を究めようと決意

2000年に高知医科大学を卒業し、千葉県流山市にある民医連の東葛病院へ。研修医時代から救急患者の対応が好きだったこともあり、東葛病院でERの道を本格的に目指すことに。その後、当院の救急担当医を経て、救急科部長を任されることになり、現在に至ります。

「当院に、救急車で１日に10台前後搬送される中には、生活が困窮している人、アルコール中毒、ホームレスなど、複雑な背景をもつ患者さんが運ばれてきます。受け入れられるか否か緊急性の判断が求められますが、できるかぎり受け入れています」

どんな事情があっても、だれもが最高水準の治療を受ける権利をもっている、と語る後藤医師。しかし、患者さんの中にはコミュニケーションを取るのが難しい人も多いそうです。

問題に介入しなければ、社会構造は変わらない

「本当に助けが必要な人は、自分から助けてとは言いません。治療やケアを拒絶されたり『死にたいからほっといてくれ』と言われたりすることも。でも、ほっとくことはできません。なぜ死にたいと考えるのか、なぜ非人間的な生活に追い込まれているのか。医療従事者が介入しなければ、社会構造は何も変わらないと思う」

ときに熱く、ときに淡々と語る後藤医師の言葉には、救急医としての使命感や強い意志があふれています。

「病気やケガを治すだけでは、問題は解決しない。だから、一人ひとりの背景や病気やケガのきっかけとなった問題に、こちらから介入し探りにいきます。たとえば、若い女の子が搬送され、薬物中毒やDV、性的虐待などの原因が考えられる場合。本人に話を聞いてみると、深刻な事実を突きつけられることが多々あります。彼女たちがここにやってきた原因を早めに察知し、そのまま家に帰すのが危険な場合、まずは入院というかたちで非難させ、警察や児童相談所などに通報します」

危険が迫る中、ぎりぎりの判断がいのちを救う

目の前の課題に果敢に切り込む姿勢は、新型コロナウイルスの重症患者に対しても揺るぎません。第６波を迎え、どの病院もコロナ病棟が満床だった時期、酸素飽和度40%という重症の患者さんの受け入れ要請がありました。すでに２時間近く病院を探しており、命の危険が迫る中、後藤医師は受け入れを決断しました。患者に人工呼吸器をつけ、集中治療を行い、行政と相談して、コロナの拠点病院に転送。患者は無事に回復しました。

「ぎりぎりの判断で救命できたことはとても嬉しい。でも、美談では終われない。社会的に複雑な背景をもつ患者さんの場合、ほかでは敬遠されることもある。救急の第一線として患者さんのSOSを察知し、何らかの手を打ち、安全な生活を確保する。これが、われわれERの役割だと思っています」

インタビューの終わりに、休日についてたずねると、仕事の顔から一変し、柔和なパパの表情に。

「家では、小４、小１、４歳の子どもたちが優先なので、私の時間はありません。阪神ファンの私の影響で、小４の息子は少年野球チームに入っています。お兄ちゃんの野球にママがつきそう場合、下の子たちの子守りをするのが、休日の私の使命です」